



1 自己評価

I 評価結果

(A:目標を上回っている B:ほぼ目標どおり C:目標を下回っている)

項目	成果と課題（達成状況）	評定
<p>主体的に学ぶ生徒の育成 ～自らデザインする授業と家庭学習～</p>	<p style="text-align: center;"><b>プロジェクトチームによる取組</b></p> <p>●授業デザインチーム『生徒自身が授業をデザインする』 4月 1月 生徒「授業の約束が守れた」 70%→95% 「他の人と協力して課題解決に取り組んだ」 70%→89% 「めあてを達成するために自分で学び方(誰と、どうやって、何を使って)を選んで取り組んだ」 65%→95% 教員「授業の約束をもとに授業を進めた」 90%→100% 「単元や一時間ごとのめあてと達成された姿を示し、自走させる授業を意識した」 85%→70% 「生徒に学び方の選択肢を示すことができた」90%→75%</p> <p>●学びのデザインチーム『多様な学び方をデザインする』 4月 1月 生徒「毎日1時間以上家庭学習を行った」 56%→62% 「学習ができるようになったと感じる」 60%→89% 教員「家庭学習の声かけややり方を提示」 70%→75% 「生徒に学習の中で、成功体験や達成感を味わわせるよう手立てを行った」 75%→83%</p> <p>「学習ができるようになった」と実感する生徒が大きく増化している。授業のユニバーサルデザイン化に成果が見られた。一部、学年に授業規律の乱れがあったが、専門家招聘による検討会議を行ったり、授業の体制を変えたりといった試行錯誤を経て、年度後半には沈静化の兆しが見られた。</p> <p>生徒の学び方の選択意識が大幅に向上する一方で、教師側の「自走させる授業意識」が低下している。授業規律の立て直しに注力した結果、生徒の学びへの主体的行動に対し、教師側の支援の在り方にギャップが生じてしまったと考えられる。</p>	B
	<p style="text-align: center;"><b>プロジェクトチームによる取組</b></p> <p>●セルフデザインチーム『人生をデザインする力をつける』 4月 1月 生徒「自分の夢や目標を持っている」 70%→72% 「その場に応じた言動ができる」 80%→95% 「相手の気持ちを考えた言動ができる」 80%→97% 「いじめや嫌なことを言わない」 80%→84%</p>	

<p>人権意識・自己肯定感の向上</p> <p>～温かい人間関係～</p>	<p>教師「全ての生徒に温かい声かけをする」 100%→100%</p> <p>「人権感覚を持ち、人権侵害を見逃さない」80%→100%</p> <p>●わくわくデザインチーム</p> <p>『ぬくもりのある時間や空間をデザインする』 4月 1月</p> <p>生徒「学校は安心して登校できる場所である」65%→92%</p> <p>「学校は楽しい」 否定的 16%→8%</p> <p>教員「仕事にやりがいを感じる」 83%→100%</p> <p>「職場は心理的安全性が保たれている」 90%→92%</p> <p>「学校は楽しい」「安心して登校できる場所」という回答が大幅に上昇した。また、教員の「仕事へのやりがい」が100%に達し、職場環境の良さが窺える。組織的な対応により教員の心理的安全性が確保されたものと思われる。一部の生徒の言動には依然として課題が残るものの、組織体制は強固になってきている。</p>	<p>A</p>
<p>保護者・地域との連携</p>	<p>●PTA活動・CS活動の活性化と協働 4月 1月</p> <p>生徒「自分の住む地域が好き」 84%→85%</p> <p>「地域や社会のために何かしたい」 63%→70%</p> <p>「地域の活動や行事に参加している」 87%→90%</p> <p>保護者「学校行事などは充実している」 85%→91%</p> <p>「参観授業やPTA活動に参加している」</p> <p>※よくあてはまる 18.2%→25.2% (全体74%)</p> <p>吹奏楽部の地域貢献や、PTA・生徒会連携による「スクールカフェ」「フードドライブ」「鶴山フェスティバル」等の取組が成功し、生徒、保護者とも行事満足度は上昇した。地域活動への参加意欲も向上しており、「地域とともにある学校」の実装が大きく進んだ。持続可能な体制づくりが次年度の鍵となる。</p>	<p>A</p>

## II 分析・改善方策

<p>本年度は「誰もが行きたい・保護者地域が行かせたい学校」をビジョンに掲げ、4つのプロジェクトチームを軸に改革を推進してきた。何より教職員がやりがいを持って組織的に取り組んできたことで目標達成に近づくことができた。</p> <p>○「知」：主体的学びの深化と定着について</p> <p>生徒が自ら学び方をデザインする手法で成果を上げた一方、一部で授業規律が不安定な時期があり、学力向上に結びつくプロセスに課題を残した。次年度は、専門家と連携した試行錯誤を継続し、環境の安定と学力向上を両立させたい。</p> <p>○「徳」：ソーシャルスキルの獲得と人間関係づくりについて</p> <p>数値上の改善は見られるものの、日常的な言動への落とし込みは途上である。次年度も SCP</p>
---

(ソーシャルスキル&キャリア教育プログラム) や構成的グループエンカウンターを継続し、温かい人間関係を構築するとともにスキルの獲得を直接的に支援していく。

○「PTA・地域活動」：持続可能な連携体制の構築について

PTA 活動への参加者の増加や地域連携の活性化は、生徒に「所属感」と「安心感」を与え、自己有用感の形成に効果があったと思われる。この流れを加速させ、学校運営協議会や地域ボランティアとの連携をさらに深化させたい。

○ 不登校支援について

不登校生徒の減少、および別室登校や地域イベントへの参加といった「再登校・社会参画」への前向きな動きが見られた。多様な居場所づくりが「誰もが行きたい学校」の実現に寄与していると分析する。また、令和8年度より本校内に設置される「学びの多様化の学級」について、本校教職員とともに研修を深め、効果的な運営を行いたい。

2 学校関係者評価委員会

谷西 史郎 (育成会会長) 森 尚美 (元教育委員) 坂本 修三 (保護司)  
小川 創 (主任児童委員) 辻 章 (前PTA会長) 須一 友紀 (PTA会長)

3 学校関係者評価4 来年度の重点取組 (学校評価を踏まえた今後の方向性)

- 「やりがいを感じている教職員が100%である」ことは極めて重要であり、高く評価したい。先生方の熱意が学校活性化の原動力となっている。
- 地域連携の多様な取り組みが、生徒の自己肯定感や自己有用感の向上に直結している。生徒の生き生きとした表情にその成果が表れており、今後も学校・家庭・地域が一体となった活動を持続させたい。
- 学力定着については、プロセスを重視する姿勢を支持する。人権意識や自己指導力には個別の課題も見られるが、全体的な向上を認め、継続的なコミュニケーションスキルの指導を期待する。

4 来年度の重点取組 (学校評価を踏まえた今後の方向性)

① 重点目標の継続と深化

本年度の成果を基盤に、引き続き「主体的な学び」「人権意識の向上」「地域連携」を3つの柱に据え、取組の質の向上を図る。

② 学校運営協議会(CS)を核とした連携システムの構築

地域連携をより機動的かつ継続的に実施するため、学校運営協議会をハブとした組織的なマネジメントシステムを構築し、学校・家庭・地域の協働体制を強化する。

③ 持続可能なPTA活動への転換(最適化)

世帯数の減少という社会背景を鑑み、PTA組織や行事の精査・スリム化を断行する。保護者の負担軽減を図りつつ、「参加しやすく意義を感じられる活動」への再編を模索する。

④ 教職員のウェルビーイングを基盤とした学校経営

すべての教育活動の質は教職員の心身の健康(ウェルビーイング)の上に成り立つ。本年度の「やりがい100%」という実績を維持・発展させるため、働き方改革を推進し、心理的安全性の高い職場環境を継続的に整備する。